Report (報 告)

大東諸島北大東島で2013年7月に確認した鳥類

姉崎 悟¹

Birds Observed on Kita-Daito Island, Daito Islands, in July 2013

Satoru Anezaki¹

Abstract. Between 14th–16th July 2013, 11 species of birds were observed on Kita-daito Island, Daito Islands. Of these, six species included juveniles. In this survey, the Mallard *Anas platyrhynchos* which had bred there in the past, was not observed, and it may no longer be present on this island.

Key words: Kita-Daito Island, Breeding Birds.

キーワード: 北大東島, 繁殖鳥類.

はじめに

大東諸島は、北大東島と、その約8 km 南西に位置する南大東島、および約160 km 南に位置する沖大東島の3島からなり、大東諸島以外で北大東島に最も近い島は約290 km 北西に離れた喜界島になる。広い洋上に近距離で隣り合う北大東島と南大東島（以下、南北二島）は生息する生物に共通種が多く、また、ほぼ同時期に始まった人の定住（南大東島は1900年、北大東島は1910年から開始）により、大規模な森林伐採、サトウキビ畑の拡大、移入樹による防風林の植林、そしてネズミ・害虫駆除を目的とした動物の移入といった、多くの共通した環境変化を経て現在にいたっている（北大東村誌編集委員会 1986, 南大東村誌編集委員会 1990）。

南北二島ではこれまで、人為分布種を除き216種の鳥類が確認されているが（姉崎 2012; 戦前には、当時メボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas* の亜種とされたコムシクイ *P. borealis* とオオムシクイ *P. examinandus* の記録もあるが、現在の知見による再検討が行われていないので、本稿ではこれら3種を含むメボソムシクイ上種を1種として数えることとする）、その大半は渡り鳥や迷鳥といった非繁殖種で、繁殖種は、短期間の定着種を除くと表1に示す20種と考えられている。大東諸島固有亜種が記載されているノスリ *Buteo buteo* とミソサザイ *Troglodytes troglodytes* がこの中に含まれていないが、これは、戦前の繁殖を示唆する情報が現時点で確認できないため、ノスリは短期間の定着であった可能性、ミソサザイは迷行個体であった可能性を考えたことによる（姉崎 2012）。

北大東島では115種が確認され（姉崎ほか 2003 および髙原ほか 2004 による118種から、分

Received 20 November 2014.

¹ 〒489-0981 愛知県瀬戸市ひまわり台二丁目50. E-mail: acharo_3106@nifty.com

¹ 2-50 Himawari-dai, Seto, Aichi 489-0981, Japan. E-mail: acharo_3106@nifty.com

表1. 北大東島と南大東島の繁殖鳥類 (姉崎ほか 2003, 姉崎 2012). 定着が短期間の種を除く. ◎: 繁殖を確認. ○: 分布するか繁殖は未確認.

	種名	北大東島		備考
		北大東島	南大東島	
開拓後に 繁殖個体群が 消滅	リュウキュウカラスバト <i>Columba jouyi</i>	○	○	南大東島では秋期に幼鳥の記録あり. 最終記録は1936年.
	アホウドリ <i>Phoebastria albatrus</i>	○		北大東島で1919年頃まで繁殖していたという渡島者の記述がある.
	アナドリ <i>Bulweria bulwerii</i>		○	1936年6月と1937年7月に採集記録がある.
	カツオドリ <i>Sula leucogaster</i>	○	○	北大東島で1903年に繁殖していたことを示す渡島者の記述, 南大東島で1928年7月に採集記録がある.
	オオアジサシ <i>Sterna bergii</i>	?	◎	最終記録は1928年. 北大東島では1903年にアジサシ類が繁殖していたことを示す渡島者の記述がある.
	ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>	○	○	最終記録は1924年.
	ヤマガラ <i>Poecile varius</i>	○	○	固有亜種ダイトウヤマガラ <i>orii</i> . 最終記録は1922年.
	ウグイス <i>Cettia diphone</i>		◎	亜種ダイトウウグイス <i>restricta</i> . 最終記録は1922年.
	マガモ <i>Anas platyrhynchos</i>	◎	◎	固有亜種ダイトウカイヅブリ <i>kumikyonis</i> .
	カイヅブリ <i>Tachybaptus ruficollis</i>	◎	◎	
開拓前から 現在まで 生息	リュウキュウヨシゴイ <i>Ixobrychus cinnamomeus</i>	○	◎	
	ヒクイナ <i>Porzana fusca</i>	○	◎	
	バン <i>Gallinula chloropus</i>	○	◎	
	リュウキュウコノハズク <i>Otus elegans</i>	○	◎	固有亜種ダイトウコノハズク <i>interpositus</i> . 北大東島では近年記録がない.
	ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>	○	◎	固有亜種ダイトウヒヨドリ <i>borodinonis</i> .
	メジロ <i>Zosterops japonicus</i>	○	◎	固有亜種ダイトウメジロ <i>datoensis</i> .
	イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius</i>	○	◎	
	ヨシゴイ <i>I. sinensis</i>	○	◎	
	モズ <i>Lanius bucephalus</i>	◎	◎	
	ウグイス	?	◎	亜種ウグイス <i>cantans</i> に由来する個体群 (高木 2009). 北大東島では亜種不明の個体が確認されているが, 夏期の記録がない.
開拓後に 繁殖個体群が 定着	スズメ <i>Passer montanus</i>	◎	◎	

布が疑わしい3種を除外した。付表1欄外参照), うち112種は南大東島との共通種であり, 南北二島は多くの渡り鳥にとって, 一かたまりの中継地ないし越冬地として利用されているものと推察される。一方, 繁殖種, 特に表1で戦後も繁殖個体群がみられると示した13種(以下, 繁殖13種)に着目すると, リュウキュウコノハズク *Otus elegans* は北大東島で近年記録がなく(姉崎 2012, 日本鳥学会 2012), ウグイス *Cettia diphone* は北大東島で夏期の記録がないため(姉崎ほか 2003) 繁殖しているか定かでなく, さらに北大東島には害虫駆除目的で1975年にキジ *Phasianus colchicus* が移入され定着している(北大東村誌編集委員会 1986) など, 北大東島と南大東島とでは繁殖種の構成が異なっていると考えられる。

そこで北大東島の現在の繁殖種を確認するため, 2013年7月14~16日に北大東島に滞在し, 繁殖13種の生息確認に留意して鳥類を調査したので, その結果を報告する。

方 法

北大東島(図1)は面積11.94 km², 周囲18.3 km, 最高点74 mで, 隆起環礁に由来するため, 周囲に幕(はぐ)と呼ばれる環状丘陵地が見られ, 内側は幕下(はぐした)と呼ばれる盆地状の地形になっている。無人島時代は原生林が島を広く覆い, その約3割がダイトウビロウ *Livingstonia chinensis* var. *amanoi* の林だったが(南大東村誌編集委員会 1990: p. 1009), 現在は原生林の大半がサトウキビ畑に変わり, 幕に見られる林部は, 主に防風林として植林された移入樹で構成されている。比較的大きな天然の池沼としては赤池と大池, そして大池の南隣に位置する池(本稿では以下, 小池とする)があり, このほか, 島内各地にコンクリート護岸された人工の農業用貯水池が点在している。

図1. 北大東島. 文中に登場しない池は省略した。

調査は2013年7月14～16日に実施し、移動手段に原動機付バイクを利用して、島を広く巡回して任意に観察した鳥類を記録した。観察には双眼鏡（倍率10倍）とビデオカメラ（光学30倍）を使用した。赤池、大池および小池の3か所は、岸が植物に覆われていて水鳥の生息に適していると考えられたので、朝（15, 16日の5:30～7:00）、昼（15, 16日の10:00～12:30）、夕（14, 15日の17:00～18:30）に訪れ、水鳥の確認に努めた。また、夜行性の種を調査するため、14日20:00～22:00と15日20:30～22:00に島を巡回し、鳴き声や姿の確認に努めた。

結 果

3日間の調査で自然分布種10種と、人為分布種のキジを確認した。以下、各種の確認状況について、これまでの大東諸島での分布情報と併せて記す。

カイツブリ *Tachybaptus ruficollis*

南北二島産は固有亜種ダイトウカイツブリ *T. r. kunikyonis* とされ、両島で繁殖も確認されている（姉崎ほか 2003）。南大東島では1970年代から白変個体を確認されており（姉崎ほか 2003）、北大東島でも1例記録がある（宮城・嵩原 1992）。

今回は人工の貯水池を含む複数の池で毎日確認し、赤池と大池ではヒナを連れている個体も確認した。調査期間中に白変個体は確認できなかったが、2013年10月21日から2014年10月末現在まで、1羽が継続して観察されている（中山愛子 未発表）。

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis*

南大東島では1928年2月が初記録で、1989年以降は季節を問わずほぼ毎年記録があり（姉崎ほか 2003）、2005年に巣卵が確認された（松井ほか 2006）。北大東島では1990年6月が初記録で（嵩原 1991）、その後季節を問わず記録があるが（付表1）、繁殖は確認されていない。

今回は15日朝と16日朝に小池でそれぞれ1羽を確認した。2日とも同じ場所から飛び立ち、同じ方向へ飛び去るなど行動が似ていたため、同一個体であった可能性がある。北大東島では月1回、鳥類の観察が行われているが（中山 未発表）、本調査後の2013年8月から2014年10月までの間に本種は観察されていないという。

バン *Gallinula chloropus*

南北二島には無人島時代から定着していると考えられ（姉崎 2012）、南大東島で繁殖が確認されている（日本野鳥の会 1975）。

今回は毎日赤池で成鳥を確認し、15日には小池で幼羽の個体を確認した。

セイタカシギ *Himantopus himantopus*

南北二島で季節を問わず記録があるが（姉崎ほか 2003）、これまで繁殖の記録はない。

北大東島では6～7月の観察例がなかったが、今回、15日に島北部の貯水池（図1）で1羽を確認した。後頸部は白色で、背は黒褐色、翼後縁が白くなかったため、亜種セイタカシギ *H. h. himantopus* のメス成鳥だと考えられる。

モズ *Lanius bucephalus*

1973年に南北二島で分布および繁殖が初めて確認され（森岡 1990），以降周年記録がある（姉崎ほか 2003）。1972年10月に両島で確認されたモズ類はアカモズの亜種シマアカモズ *L. cristatus lucionensis* とされたが（池原 1973），同定の根拠は不明である。1974年5月には本種，シマアカモズおよび両種の間種個体が確認されたが（日本野鳥の会 1975），その後シマアカモズの定着は確認されておらず，1998年の調査で，南大東島の個体群は本種のみの特徴を持つことが確認された（高木 2000）。

今回は毎日島内で広く確認し，幼羽の個体も確認した。今回観察した個体は全て，本種の特徴である茶褐色の頭上と黒褐色の尾が確認でき，シマアカモズに近い特徴の個体は見られなかった。

ツバメ *Hirundo rustica*

南北二島で季節を問わず記録があるが，繁殖の記録はない（姉崎ほか 2003）。類似種のリュウキュウツバメ *H. tahitica* も南北二島で稀に記録があり（姉崎ほか 2003），南大東島では2010年と2011年に営巣が確認されている（高木昌興 未発表）。

北大東島では7月の観察例がなかったが，今回，15日と16日のいずれも午前中に黒部崎にて飛翔中の1羽を確認した。同一個体だと思われる。外側尾羽が短く，一見リュウキュウツバメにも似ていたが，胸の黒帯と白色の下面がはっきり確認できたので，本種の亜種ツバメ *H. r. gutturalis* だと考えられる。

ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

南北二島産は固有亜種ダイトウヒヨドリ *H. a. borodionis* とされ，南大東島では繁殖が確認されている（姉崎ほか 2003）。

今回は毎日島内で広く確認し，幼羽の個体も確認した。

メジロ *Zosterops japonicus*

南北二島産は固有亜種ダイトウメジロ *Z. j. daitoensis* とされ，南大東島で繁殖が確認されている（Kuroda 1925, 堀江ほか 2005）。また，2008年3月に北大東島で営巣が確認されている（堀江明香 未発表）。沖大東島でも1912年までに複数の確認情報があるが（米山 1923, 北大東村誌編集委員会 1986: p. 658, 804），採集記録がなく，亜種は分かっていない。

今回，毎日林部を中心に確認できたが，繁殖は確認できなかった。

イソヒヨドリ *Monticola solitarius*

南北二島には無人島時代から定着していると考えられ（姉崎 2012），南大東島では営巣が確認されている（姉崎ほか 2003）。沖大東島でも1911年頃に採集記録がある（Kuroda 1925）。

今回は毎日，海岸部に限らず島内で広く観察でき，幼羽の個体も確認した。

スズメ *Passer montanus*

南北二島で周年記録があり，両島で繁殖が確認されている（姉崎ほか 2003）。1905年の時

点では生息を示す記述が見られず、1922年に採集されているので、この間に定着したものと考えられる（姉崎 2012）。

今回は毎日島内で広く確認し、幼羽の個体も確認した。

キジ

北大東島には1975年10月に害虫駆除目的で60羽が移入された（北大東村誌編集委員会 1986）。南大東島にも1933～34年に計4羽が移入されたが（黒田 1935）、その後記録はない。

今回は15日と16日に主に幕下の耕地で鳴き声を聞き、オス成鳥を視認した。15日は夜間にも鳴き声を聞いた。オス成鳥は、白い頸輪を持たず下面は緑色光沢のある黒色であったので、本土に自然分布する亜種が移入されたものだと考えられる。

今回の調査では繁殖13種のうち8種を確認し、うち6種は幼羽の個体を確認した。この6種および2008年に営巣が確認されているメジロは、現在北大東島において繁殖個体群が維持されているものと考えられる。

一方、今回の調査で確認できなかったのはマガモ *Anas platyrhynchos*, リュウキュウヨシゴイ *Ixobrychus cinnamomeus*, ヒクイナ *Porzana fusca*, リュウキュウコノハズクおよびウグイスの5種であった。このうちマガモ, リュウキュウヨシゴイおよびヒクイナは、2001年8月に北大東島で確認されており（姉崎ほか 2003）、当時は繁殖個体群が存在していた可能性が高い。

リュウキュウヨシゴイとヒクイナは茂み等に潜む習性があるので、今回のような短期間の調査では、生息していても確認できなかった可能性が十分考えられる。リュウキュウヨシゴイは本調査の後、2014年4月13日に観察されている（中山 未発表）。

マガモは、主に開けた水面で生活する種であり、今回確認できなかったことは、繁殖個体群が消滅した可能性を示唆している。2007年5月から月1回実施されている観察（中山 未発表）によれば、2007年7月から2010年3月まではほぼ毎月確認できたが、2010年4～8月、2011年6・8・12月、2012年1月および4～9月、2013年4～12月には確認されず、2014年は10月末の時点で、1月18日に確認したのみだという。繁殖個体もしくはかつて繁殖していた個体が2011年までは生息していた可能性があるが、2012年10月以降に観察されている個体は、おそらく北方から飛来した越冬個体のみだと思われる。

リュウキュウコノハズクについて、姉崎（2012）は1972年の記録を最後に北大東島の繁殖個体群は消滅したと述べたが、宮城・髙原（1992）に1988～92年の間に鳴き声を確認したという記録があり、また、2000年頃にも島の南部で観察されたという（髙原建二 未発表）。しかし、2003年12月2日に大阪市立大学ダイトウコノハズク保全研究グループが島内16か所で実施した鳴き声のプレイバック調査では、反応がなかった（松井 晋 未発表）。このように、近年も散発的に生息は確認されているものの、繁殖を確認したという記録はないことから、単独個体あるいはごく少数が、南大東島と北大東島の間を往来している可能性も考えられる。

ウグイスについて、北大東島では夏期に確認されることがなく（付表1）、2013年以降の観察情報としては2013年3月26日および12月28日、2014年2月9日、4月13日および10月20日がある（中山 未発表）。これらは越冬もしくは通過個体であったと思われるが、南大東島では2003年当時、繁殖個体群の生息場所が海岸部のススキ *Miscanthus sinensis* やアダン *Pandanus*

*odoratissimus*の茂みに限定されていたので(高木 2009)、現在の北大東島において、繁殖地が局所的であるために夏期に確認されていない可能性も考えられる。

今回はわずか3日間の調査であり、北大東島の現在の繁殖鳥類を把握するためにはさらなる調査が必要である。また、南大東島ないし他地域から移動してきた個体が新たに定着する可能性も考えられ、今後、繁殖鳥類の継続した調査の実施が望まれる。

なお、本調査の過程で、最近北大東島で観察された鳥類の未発表情報をいくつか得ることができ、これまで確認されていた115種のほかに、大東諸島初記録となるツクシガモ *Tadorna tadorna* とコミミズク *Asio flammeus*、北大東島初記録となるオシドリ *Aix galericulata* の記録を確認した(付図1)。これらを含めた北大東島産鳥類リストを作成したので、付表1に示しておく。なお、ドバト *Columba livia* var. *domestica* も2009年4月6日、2012年9月20日および12月23日に観察されている(中山 未発表)。いずれの個体も足環を付けていたとのことであり、おそらくレース用に放した個体が北大東島まで迷行したのではないと思われる。

謝 辞

本調査を進めるにあたり、高木昌興氏、松井 晋氏、堀江明香氏、岩崎哲也氏および嵩原建二氏には貴重な情報を提供いただき、また本稿に対し有益な助言をいただいた。渡島時には北大東村教育委員会の仲嶺仁介委員長、浅沼拓道氏および中山愛子氏にお世話になり、中山氏にはその後も島での貴重な観察情報を提供いただいた。渡久地 豊氏には未発表記録を提供いただいた。編集委員の浅井芝樹氏には多くのご教示、ご指導をいただいた。上記の方々に加え、情報収集に協力してくださった方々、原稿に目を通してくださった方々に、心より御礼申し上げる。

引用文献

- 姉崎 悟 2012. 第二次世界大戦以前の北大東島と南大東島の鳥類. 山階鳥類学雑誌 **43**: 105-151.
- 姉崎 悟・嵩原建二・松井 晋・高木昌興 2003. 大東諸島産鳥類目録. 沖縄県立博物館紀要 (**29**): 25-54.
- 堀江明香・松井 晋・高木昌興 2005. 南大東島における亜種ダイトウメジロの11月の育雛. 日本鳥学会誌 **54**: 58-59.
- 池原貞雄 1973. 大東島の陸産脊椎動物. 大東島天然記念物特別調査報告(文化庁編), pp. 52-63. 文化庁, 東京.
- 北大東村誌編集委員会(編) 1986. 北大東村誌. 北大東村役場, 沖縄.
- Kuroda, N. 1925. *A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu Kiu Islands and the Vicinity*. Published by the author, Tokyo.
- 黒田長禮 1935. 大東列島の鳥類に就て. 植物及動物 **3**: 1369-1370.
- 松井 晋・高木昌興・上田恵介 2006. 南大東島におけるヨシゴイの初営巣記録. 日本鳥学会誌 **55**: 29-31.
- McWhirter, D., Ikenaga, H., Iozawa, H., Shoyama, M. & Takehara, K. 1996. A check-list of the birds of Okinawa Prefecture with notes on recent status including hypothetical records. Bulletin of the Okinawa Prefectural Museum (**22**): 33-152.
- 南大東村誌編集委員会(編) 1990. 南大東村誌 改訂. 南大東村役場, 沖縄.
- 宮城邦治・嵩原建二 1992. 北大東島の鳥類と哺乳類. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書(沖縄県教育委員会編), pp. 53-62. 沖縄県教育委員会, 那覇.
- 森岡弘之 1990. トカラ列島の繁殖鳥類とその起源. 国立科学博物館専報 (**23**): 151-166.
- 日本鳥学会(編) 1974. 日本鳥類目録 改訂第5版. 学習研究社, 東京.
- 日本鳥学会(編) 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.

- 日本鳥類目録編集委員会(編) 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本野鳥の会(編) 1975. 特定鳥類等調査. 環境庁, 東京.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編) 1997. 特殊鳥類等生息環境調査X—伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島 湿地編一. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.
- 沖縄野鳥研究会(編) 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会, 沖縄.
- 沖縄野鳥研究会(編) 2002. 沖縄の野鳥. 新報出版, 那覇.
- 沖縄野鳥研究会(編) 2010. 改訂版 沖縄の野鳥. 新星出版, 那覇.
- 高木昌興 2000. 南大東島に生息するモズの羽色および形態の記載, 島内の分布状況と繁殖生態. 山階鳥類研究所研究報告 **32**: 13-23.
- 高木昌興 2009. 島間距離から解く南西諸島の鳥類相. 日本鳥学会誌 **58**: 1-17.
- 嵩原建二 1991. 北大東島の鳥類について. 沖縄県教育委員会文化課紀要 (7): 88-98.
- 嵩原建二・中村和雄・松井 晋 2004. 大東諸島における鳥類の生息状況と保護すべき貴重種. 平成15年度大東諸島環境情報収集調査報告書(琉球列島鳥類研究会編), pp. 29-83. 環境省沖縄奄美地区自然保護事務所, 那覇.
- 山成不二磨 1935. 北大東島に於ける磷酸礬土鉱床. 東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告 (15): 1-65.
- 米山兆二 1923. 磷酸礬土鉱石の利用法. 地学雑誌 **35**: 259-270.

付図1. 大東諸島初記録(A, B)および北大東島初記録(C)の種. A: ツクシガモ *Tadorna tadorna* (2010年1月9日中山愛子氏撮影. 以下同様), B: コミミズク *Asio flammeus* (2013年12月28日), C: オシドリ *Aix galericulata* (2010年11月21日).

付表1. つづき

科	種名	記録が ある時期	確認された月												備考
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
シギ科	コアオアシシギ <i>Tringa stagnatilis</i>	CE	●				●			●			●		2009年9月27日, 2012年5月26日, 同年12月23日, 2013年1月26日に各1羽を確認 (中山 未発表). 1988~92年の調査でも確認 (宮城・高原 1992).
	アオアシシギ <i>T. nebularia</i>	CE		●						●					2010年2月22日, 2012年10月21日, 2013年2月2日, 同年8月24日に各1羽を確認 (中山 未発表). 1988~92年の調査でも確認 (宮城・高原 1992).
	クサシギ <i>T. ochropus</i>	BCDE	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	タカブシギ <i>T. glareola</i>	BCDE	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	キアシシギ <i>Heteroscelus brevipes</i>	C													
	イソシギ <i>Actitis hypoleucos</i>	BCDE	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	キョウジョシギ <i>Arenaria interpres</i>	CE				●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ヒバリシギ <i>Calidris subminuta</i>	C													
	アメリカウズラシギ <i>C. melanotos</i>	D									○	○	○	○	
	ハマシギ <i>C. alpina</i>	D													
カモメ科	エリマキシギ <i>Philomachus pugnax</i>	D									○				
	ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>	C	○												
	ベニアジサシ <i>Sterna dougallii</i>	CE				●			●	○			●		2007年6月17日に2羽, 2008年6月7日に11羽, 同年8月31日に3羽, 2009年7月26日に1羽, 2012年9月22日に3羽, 同年10月8日に1羽, 2014年9月21日に3羽を確認 (中山 未発表). このほか, 宮城・高原 (1992) に1991年の観察情報がある.
	クロハラアジサシ <i>Chlidonias hybrida</i>	CE					●		●	●	●	●	●		
ミサゴ科	ミサゴ <i>Pandion haliaetus</i>	[A] CDE	○	●	○							○	○	○	
タカ科	アカハラダカ <i>Accipiter soloensis</i>	CD									○	○		○	
	ツミ <i>A. gularis</i>	C													
	サシバ <i>Buastur indicus</i>	CDE						○				○	○	○	2007年以降の記録は, 2008年3月16日の1羽確認のみ (堀江・渡久地 未発表).
	ノスリ <i>Buteo buteo</i>	BCE				●					○	○	○	○	南大東島で1964年に繁殖例あり, 固有亜種ダイトウノスリ <i>B. h. oshiroi</i> とされる.
フクロウ科	リュウキュウコノハズク <i>Onus elegans</i>	[A] BCD										○			1922年と1972年以外は確認月不明.
	アオバズク <i>Ninox scutulata</i>	ACD										○			
	コミミズク <i>Asio flammeus</i> *	E												●	2013年12月28日に1羽確認 (中山 未発表).
ヤツガシラ科	ヤツガシラ <i>Upupa epops</i>	CE	●												1月の記録は, 筆者が浜浩二六荘にて2009年に撮影された写真を確認. このほか, 1988~92年の調査でも確認 (宮城・高原 1992).
カワセミ科	カワセミ <i>Alcedo atthis</i>	CDE	●	●	○	●	●	●	○	○	○	○	○	○	南大東島で巣穴の確認例あり.

付表1. つづき

科	種名	記録がある時期	確認された月												備考
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ハヤブサ科	チョウゲンボウ <i>Falco timunculus</i>	[A] CDE	●	●	●	●	○	○	●	○	○	○	○	○	
サンショウクイ科	サンショウクイ <i>Pericrocotus divaricatus</i>	C	○												
モズ科	モズ <i>Lanius bucephalus</i>	BCDE	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	アカモズ <i>L. cristatus</i>	AB					○	○				○			
カラス科	ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>	[A]										[○]			
シジュウカラ科	ヤマガラ <i>Poecile varius</i>	A										○			
ツバメ科	シヨウドウツバメ <i>Riparia riparia</i>	D				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	ツバメ <i>Hirundo rustica</i>	[A] BCDE	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
	リュウキュウツバメ <i>H. tahitica</i>	B?							(年月不明)						
	イワツバメ <i>Delichon dasypus</i>	D										○			
ヒヨドリ科	ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaunites</i>	[A] BCDE	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ウグイス科	ウグイス <i>Cettia diphone</i>	BCDE	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	ヤブサメ <i>Urosphena squameiceps</i>	CE	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2007年以降の記録は、2008年3月15日に1羽確認のみ (堀江 未発表)。
ムシクイ科	ムジヤッカ <i>Phylloscopus fuscatus</i>	D				○						○	○	○	
	キマユムシクイ <i>P. inornatus</i>	D				○						○	○	○	
	メボソムシクイ上種 <i>P. [borealis] superspecies</i>	AC										○	○	○	
	メジロ <i>Zosterops japonicus</i>	[A] BCDE	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ムクドリ科	ムクドリ <i>Spodiopsar cinereus</i>	CDE		○									○		
	コムクドリ <i>Agropsar philippensis</i>	B? C	●						(年月不明)						日本鳥学会 (1974) に分布を示す記述あり、1988~92年の調査でも確認 (宮城・嵩原 1992)。
	ホシムクドリ <i>Sturnus vulgaris</i>	D											○		
ヒタキ科	クロツグミ <i>Turdus cardis</i>	C										○	○	○	
	シロハラ <i>T. pallidus</i>	CE	○	○	○										2007年以降の記録は、2008年3月16日と17日に各1羽確認のみ (堀江・渡久地 未発表)。
	ツグミ <i>T. naumanni</i>	CD	○	○	○							○	○		2008年3月16日に鳴き声を確認 (渡久地 未発表)。北大東村誌編集委員会 (1986) にも記述があるが、欄外のトウネンとウズラシギ同域、当時は未記録だった可能性が高い。
	ノゴマ <i>Luscinia calliope</i>	C? E				●									
	ジョウビタキ <i>Phoenicurus aureus</i>	CDE		●	○	○						○	○	○	●

付表1. つづき

科	種名	記録がある時期	確認された月												備考
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ヒタキ科	インビヨドリ <i>Monticola solitarius</i>	BCDE	○	●	○	●	○	○	●	○	○	○	○	○	
	エゾビタキ <i>Muscicapa griseisticta</i>	CD								○			○		
	コサメビタキ <i>M. daurica</i>	D								○					
スズメ科	スズメ <i>Passer montanus</i>	[A] BCDE	○	●	●	●	○	○	●	○	○	○	○	○	
	キセキレイ <i>Motacilla cinerea</i>	[A] BCDE	●	●	○	●				○	○	○	○	●	
	ハクセキレイ <i>M. alba</i>	CDE	○	○	○	○						○	○	○	
セキレイ科	マミジロタヒバリ <i>Anthus richardi</i>	D				●								○	姉崎ほか (2003) は1988～92年にも記録があると記したが、これは次種の誤り。 1988～92年の調査で確認 (宮城・高原 1992)。
	ムネアカタヒバリ <i>A. cervinus</i>	C							(年月不明)						
	アトリ <i>Fringilla montifringilla</i>	D											○		1988～92年の調査で確認 (宮城・高原 1992)。
アトリ科	カワラビワ <i>Chloris sinica</i> *	C								(年月不明)					
	マビワ <i>Carduelis spinus</i>	D										○			
	シメ <i>Coccothraustes coccolthraustes</i>	CD											○		
	イカル <i>Eophona personata</i>	C							○				○		
ホオジロ科	ミヤマホオジロ <i>Emberiza elegans</i>	C							(年月不明)						1988～92年の調査で確認 (宮城・高原 1992)。
	アオジ <i>E. spodocephala</i>	D											○		

姉崎ほか (2003) はウミウ *Phalacrocorax capillatus*、トウネン *Calidris rifcolitis* およびウズラシギ *C. acuminata* も北大東島に分布するとしたが、以下を理由に本表では対象外とした。

ウミウは1990年12月と1991年1月に確認されたとの報告があるが (McWhirter *et al.* 1996, 沖縄野鳥研究会 2002), 1991年1月の個体は当初カワウと報告されており (高原 1991), 撮影された個体 (沖縄野鳥研究会 2002) は嘴の基部の楔出部が口角の部分で尖ってはならず、カワウの特徴に一致していた。その後、沖縄野鳥研究会 (2010) はウミウの分布域に北大東村を挙げているので、ウミウとされた記録はカワウの誤認であった可能性が高いと考えた。

トウネンとウズラシギは北大東村誌編集委員会 (1986) が陸産脊椎動物目録に載せているが、この目録には、執筆者の「南大東島から記録されたが、おそらく北大東島にも生息していたであろう」(北大東村誌編集委員会 1986: p. 75) との推測によって、過去に北大東島で記録がないミンサザイ *Troglodytes troglodytes* も載っている。トウネンとウズラシギも1986年以前に北大東島での採集記録および観察記録が見当たらず (姉崎ほか 2003), 当時の日本鳥類目録 (日本鳥学会 1974) の内容を確認したところ、分布域が「大東群島」となっていた。このことから、おそらく執筆者は大東群島＝「北大東島にも分布する」との推測によって陸産脊椎動物目録に載せた可能性が高いと考えた。